

学生海外調査研究	
G.V.ローシーの在日以前の活動とその背景に関わる史資料収集	
山田 小夜歌	比較社会文化学専攻
期間	2016 年 10 月 31 日～2016 年 11 月 13 日
場所	ミラノ（イタリア）、ロンドン（英国）
施設	ブレラ国立図書館、ミラノ市立中央図書館、アンブロジアーナ絵画館付属図書館、ミラノ・スカラ座付属博物館、ヴィクトリア&アルバート博物館・閲覧室、大英図書館

内容報告

1.調査の必要性・目的

筆者は、大正初期にバレエやダンス、所謂「洋舞」をわが国にはじめて本格的に導入した、バレエ教師・振付演出家 G.V.ローシー[Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?]に着目して研究を継続している。

ローシーは、祖国イタリアにてバレエの教育を受けた後、プロフェッショナルとしてイタリア、そして英国ロンドンのヴァレエティ劇場を中心に、ダンサー・振付家として活動した。その後、ローシーは明治末期に開場した帝国劇場の歌劇部の教師として日本に招聘され、舞踊、歌劇・喜歌劇、現代劇作品の上演に関わり、歌劇部の解散後も 1918 年にアメリカに渡るまで自ら主宰したローヤル館にて作品の上演を続けた。

日本において約 5 年半（1912.8-1918.3）活動したローシーは、先行研究において彼が「日本で初めてバレエを教えた教師」（上野、1992、p.1）として位置づけられているように、日本洋舞黎明期におけるキーパーソンであると認識されていることがわかる。それにも関わらず、ローシーという人物や活動内容について研究が十分に成されているとは言いがたい。

これまで、筆者が国内の史資料を渉猟し、分析・検討を進めてきた結果、彼の在日中のバレエ指導および上演活動は、出身母体であるミラノ・スカラ座 *Teatro alla Scala*（以下、スカラ座）の指導方針や 19 世紀末～20 世紀初頭のイタリア・バレエとロンドンのヴァレエティ劇場におけるバレエの影響を色濃く受けていた可能性が示唆された。今後、彼の在日中の活動の全貌を解明し、ローシーの「バレエ観」に迫るためには、本人のスカラ座やヴァレエティ劇場での関わり方に加えて、同劇場の作品の傾向や特徴、上演の実態、また作品や劇場に対する社会的評価の調査・検討が不可欠となる。以上を解明するために重要となる一次史資料は、日本国内に所蔵はない。

したがって、本調査では、ローシーのイタリア時代（1867-1900）のスカラ座や附属バレエ学校 *Scuoladi ballo alla Ssala* 関係資料と上演記録、そしてロンドン時代（1900-1912）に関わったヴァレエティ劇場（アルハンブラ劇場 *Alhambra Theatre* およびエンパイア劇場 *Empire Theatre*）の公演プログラムや劇場関係資料、関係する新聞・雑誌記事といった史資料の閲覧と収集を目的とした。

こうして得られた資料を読み解き、分析していくことで、これまで明らかにされてこなかったローシーの日本における上演活動について、より詳細に理解が得られるものと考えられる。

2.調査の内容・成果

2-1.ミラノ（イタリア）における史資料調査

筆者は、今回ミラノでの現地調査を行うにあたり、スカラ座と附属バレエ学校に関する一次資料を多く所蔵するスカラ座付属博物館内図書室およびスカラ座附属バレエ学校図書館に事前に連絡を取り、資料閲覧の申し込みを行っていた。しかし、調査の 1 週間前に先方の都合により閲覧室を急遽閉館するとの連絡を受け、両館での資料の閲覧が叶わなかった。しかし、スカラ座附属博物館の学芸員が、筆者の調査および研究内容に関わる書籍情報、館所蔵資料の目録、イタリア国内資料 web 検索システムおよび新聞閲覧システムのアカウントを提供して下さった。それにより、本調査は、筆者が事前に調べ得た資料や施設に関する情報の他に、同学芸員の情報提供に基づいて行われた。

2-1-1. ブレラ国立美術学院附属図書館、アンブロジアーナ絵画館付属図書館におけるスカラ座のバレエ台本・プログラム・劇場関係資料の閲覧およびミラノ市立中央図書館における書籍『ミラノ・スカラ座 1778-1906—その歴史と統計』 *La Scala 1778-1906, Note Storiche e Statistiche* の閲覧

ブレラ国立図書館 *Biblioteca Nazionale Braidense*、アンブロジアーナ図書館 *Biblioteca Ambrosiana* は、いずれも絵画館・絵画館附属学校に付随した図書館で、ブレラのリコルディ・アー

カイク *Ricordi Archives* をはじめ、スカラ座を含むイタリア音楽(舞踊)関係の資料を数多く所蔵している。

ミラノ市立中央図書館 *Biblioteca Comunale Centrale Sormani* が所蔵する『ミラノ・スカラ座 1778-1906 年—その歴史と統計』*La scala 1778-1906, Vote storiche statistiche* は、各シーズン毎のダンサーの姓名や階級、出演作品等を年代順にまとめたもので、スカラ座の上演作品と関与した人物を知る上で貴重な資料である。

イタリアにおけるバレエは、1778 年に開場したスカラ座を中心に発展し、1830 年～40 年代にはロマンティック・バレエの中心の一つともなった。19 世紀後半、バレエの中心がロシアの帝室劇場へと移り、マリウス・プティパ[Marius Petipa]によるクラシック・バレエが全盛期を迎えると、パリと同様、イタリアにおいてもロマンティック・バレエに対する熱狂には陰りが見られるようになる。その結果、幻想を追い求めるバレエではなく、大規模な美術と多数の出演者を用い、大衆の好みを反映した娯楽的要素の強いバレエがイタリアの劇場の主流を占めるようになった。そういったスペクタクル志向の強いバレエの代表的な振付家として知られているのがルイジ・マンゾッティ [Luigi Manzotti] である。マンゾッティの作品は、「現在理解されているバレエとは異なる」(Beaumont, 1956, p.638)、「芸術的に、そして音楽や振付面でも退化している」(Beaumont, 1956, p.169) などと、ロマンティック・バレエ作品に比してネガティブな評価が散見される。しかしながら、当時、ロシアを除いて唯一大規模なバレエを上演しうる力を維持していたオペラ・ハウス、スカラ座において、民衆からの圧倒的な人気を得ていたマンゾッティの作品は、バレエ史の一時代を築いたともいえるだろう。

本年度の調査では、上記の 3 図書館が所蔵するスカラ座のバレエ脚本およびプログラムと『ミラノ・スカラ座 1778-1906 年・その歴史と統計』、さらに前項で挙げたイタリア国内資料 web 検索システムを用いて、ローシーのイタリア時代と同時期のスカラ座を中心としたバレエ作品と、ローシーの関与の有無を調査した。

作品に関しては、スカラ座ではやはり《エクセルシオール》*Excelsior*、《愛のバラ》*Rosa D'Amore*、《シーバ》*Siebe*、《スポーツ》*Sports*、といったマンゾッティ作品の上演が多数確認された。

その一方で、サン・レオン[Arthur Saint-Léon]振付の《泉》*La Sorgente* (初演：1866 年、パリ・オペラ座) やプティパ振付の《眠れる森の美女》*La Bella Dormente* (初演：1890 年、マリンスキー劇場) など、ロマンティック・バレエやクラシック・バレエを代表する振付家の作品が、スカラ座のダンサーたちによって上演されていたことが明らかとなった。また、ヨーゼフ・ハースライター[Josef Haßreiter]振付の《人形の精》*Die Puppenfee* (初演：1888 年、ウィーン宮廷歌劇場) の上演も認められた。《人形の精》は後にローシーが活動拠点としたロンドンのエンパイア劇場でも上演されているほか、彼が帝国劇場で上演した《三越呉服店玩具部》のもとになった作品である可能性がある。

また、バレエ作品の上演は単独ではなく、オペラとともに上演される場合が多かったようだ。例えば、先に挙げたプティパ振付の《眠れる森の美女》は《アンドレア・シェニエ》*Andrea Chénier* のあとに、ハースライターの《人形の精》は《ファルスタッフ》*Falstaff* のあとに上演されている。

上演プログラムから、スカラ座のバレエやオペラの上演には附属バレエ学校の生徒も多数上演していることがわかった。ローシーと同世代のバレリーナ、カルロッタ・ブリアンザ[Carlotta Brianza]やエミリア・ザンベッリ[Emilia Zambelli]など、女性生徒の名前が見られた一方で、ローシーを含む男性生徒の名前は確認されないことから、バレエ学校生徒の出演は女性の場合が多かったのかもしれない。

上記の資料からローシーの出演記録を探したところ、1892 年から 1901 年にかけて「G.V.Rosi」または「Vittorio Rosi」という名のダンサーがスカラ座、その他の劇場で少なくとも 10 作品に出演していたことが明らかとなった。

イタリア国内における「Vittorio Rosi」の最も古い出演歴は、1898 年にトリノのヴィットリオ・エマニュエル劇場 *Teatro Vittorio Emanuele* において、ルイジ・ダンゼイ [Luigi Dansei] 振付のバレエ《メッサリーナ》*Messalina* に出演したもので、「Rosi」は「Pallante, libretto di Claudio」というソリスト級の役を担当している。

また「Rosi」の出演はバレエ作品のみならず、スカラ座で「Pantomima」と称された作品にも出演した。同じ「Pantomima」に出演した「Ugo Perfetti」という人物は、スカラ座の《人形の精》にも出演しており、スカラ・ダンサーの活動の一側面が浮かび上がってくる。

また資料から、イタリア国内のみならず、1892 年の南米・ブエノスアイレスでの上演にも「Vittorio Rosi」の出演が認められた。ローシーは、在日中自らの経歴について、チアッキ・オペラ・カンパニーとともにバタヴィア(ジャカルタ)、インド、エジプト、南米を巡業し、ブエノスアイレスでは長期公演を行ったと明らかにしている。今後資料の分析を進め、その関係性について検討したい。

既述の「Vittorio Rosi」が出演した《メッサリーナ》はトリノのヴィットリオ・エマニュエル劇場

での公演以前にスカラ座でも上演されている。《泉》のプログラムからは、スカラ座を皮切りに、ローマ、ナポリ、パレルモといったイタリア国内の各都市、そしてパリとロンドンでの上演が予定されていることが読み取れた。さらに、「Vittorio Rosi」と度々共演し、上記のトリノやブエノスアイレスでの公演にも出演した「Luigia Cristino」は、1898年にスカラ座でプティパの《眠りの森の美女》が上演された際にも主要キャストとして出演していたことが分かった。

以上から、イタリアのスカラ座に出演したダンサーが、ロシアのクラシック・バレエ上演に関わったほか、南米の劇場にも出演した形跡があること、そしてスカラ座のバレエ・プロダクションは欧州の大都市各地でも上演がなされていたことがわかる。

筆者は、昨年度のヴィクトリア&アルバート博物館（ロンドン）での調査を経て、ロンドンでローシーの活動拠点となったアルハンブラ劇場では、エージェントの仲介を通して、振付家・教師・ダンサーが他の劇場間を往来したほか、衣裳の売買やプロダクションの輸出が行われるなど、パリやベルリン、ベルギーといった国境を越えて他地域の劇場と盛んに交流していたことを指摘した。本年度のイタリアのスカラ座に関する調査によって、当時の劇場間の往来は大陸をも越えていたことが改めて明らかとなった。

なお、今回の調査において着目したローシーに関わる「G.V.Rosi」または「Vittorio Rosi」の表記には、出典によって姓名の表記や肩書きが多少異なるほか、ファーストネームの記載がない年代もあり、何れの「Rosi」がG.V.ローシーなのか検討する必要性が残った。

今後は、周辺文献および日本国内でも閲覧可能な *Teatro Illustrato* や *Illustrare di Italiano* といった新聞記事を用いて、さらに分析・検討を進めていきたい。

2-1-2. ミラノ・スカラ座附属博物館展示室資料の閲覧

始めに述べたように、本調査では図書室の訪問は叶わなかったが、スカラ座博物館資料の一部を常設展示室において閲覧した。それは、伝統的な幕間劇、コメディ・デラルテの上演が盛んだった時代から今日のバレエやオペラに至るまでのスカラ座を中心としたパフォーミング・アーツの軌跡を垣間みることが出来る。中には舞台照明や舞台設備の発展の歴史や、各時代に名を馳せたアーティストの肖像画、舞台スケッチが展示されるなど、スカラ座の上演活動の背景をうかがい知ることができた。

2-2. ロンドン（英国）における史資料調査

2-2-1. ヴィクトリア&アルバート博物館・閲覧室におけるアルハンブラ・エンパイア劇場関係資料の閲覧

ヴィクトリア&アルバート博物館の閲覧室は、本館において展示している各部門の収蔵品のうち特に貴重な資料を保存・公開している。筆者は、昨年度の調査と同様に、シアター&パフォーマンス・コレクションのダンス担当学芸員であるジェーン・プリッチャード氏[Jane Pritchard]と事前に連絡をとり、筆者の研究内容を伝えた上で有益な資料を出納して頂いた。今回は昨年以上に調査期間が短く、また閲覧室が週3日のみの開館ということもあり、多数ある資料の中から、上演作品の内容やローシー夫妻の出演状況の調査に不可欠な1901年から1912年の劇場関係資料、特にアルフレッド・モウル・コレクション[Alfred Moul Collection]の中で昨年度閲覧が果たせなかった資料を優先して閲覧した。同コレクション名にあるアルフレッド・モウルは、二度に渡ってアルハンブラ劇場の総支配人[General Manager]を務めた人物である。その在任期間はローシーのロンドンでの活動期間と重なるため、モウル・コレクションは筆者の研究に大変有効な一次資料となる。

今回閲覧したコレクション資料のほとんどは、モウルと衣裳製作会社やエージェント、アルハンブラに作品提供を行った作曲家・脚本家・振付家、欧州内外の劇場周辺関係者等との往復文書である。

アルハンブラで上演されたバレエ作品に関わった作曲家や脚本家とモウルとの書簡からは、作品制作の経緯や特徴、出演したダンサー、そしてその評価などを読み取ることができる。

例えば、アルハンブラでローシーも振付家の一人として関わった《四季》*All the Year Round*(1904)の作曲を手掛けたジェームズ・グローヴァー[James Glover]は、「私は、この作品を“up-to-date”で最高にモダンな英国式ディヴェルティスマンに仕上げることを勧める。そのために、(中略)多種多様なダンスを盛り込み、パリとは異なる壮大なショーに仕上げるのだ。」²との書簡を送付し、台本の再構成を要望している。

同時期、アルハンブラやエンパイアのバレエは、“up-to-date”と称し、時の英国の政治や国際情勢、旅や喫煙など民衆の趣味娯楽、時の流行ものをテーマにした作品が多く上演され人気を呼んでいた。このグローヴァーの書簡からは、彼が“up-to-date”を作品内容のテーマとしてのみではなく、その音楽や演出にも取り入れようとする意図が読み取れる。このグローヴァーの意図がどの程度反映されたのかは不明だが、《四季》は最新式の豪華絢爛な舞台装置と様々なジャンルのダンス音楽を組み合わせたスペクタクル要素に富んだ作品となり、好評を博した。こうした、ヴァラエティ劇場のバレエが“up-to-date”という「最先端」を作品内容のみならず、視覚的・聴覚的演出要素にも取り入れ、総合的な

“up-to-date” バレエ作品の上演を目指していた様子は注目される。

なお、往復文書は所蔵数が膨大であったため、滞在中に全ての資料に目を通すことは出来なかったが、全てデジタルカメラで撮影してデータを持ち帰ることが出来た。そのデータ数は 1000 を超えており、今後じっくりと読み込み分析を行いたい。

また、本年度の調査によって、アルハンブラには一時的にバレエ学校が存在し、1910 年に廃止された形跡があることが判明した。ただし、それはフランス、イタリア、ロシアが有するような体系的なバレエ学校ではなかったことから、スケッチ紙がロンドンにバレエ学校が存在しないことを嘆く記事を度々掲載する一因になったものと考えられる。また、世界初の体系的教育システムを取り入れた学校とも言われたミラノ・スカラ座バレエ学校出身で、アルハンブラのバレエ・マスターを務めたルチア・コルマーニ[Lucia Corman]やアルフレッド・クーティ[Alfred Curti]らが、アルハンブラのバレエ学校の再建を求めて、劇場支配人に宛てた意見書を送付していたことも明らかとなった。

さらに、ローシー自身がロンドンでダンス・スタジオを構えて指導にあたっていたことも判明した。1912 年にローシー・ダンス・スタジオが送付した書簡には、指導内容として「クラシカル・ダンス」と「キャラクター・ダンス」の両方が掲げられている。

バレエ史研究者のアイヴァ・ゲストは当時のアルハンブラやエンパイアでのバレエの稽古について「今日的な稽古に比べれば全く不十分であった」と指摘している³。当時の実際の公演においても、作品全般に高評価が与えられた一方で、バレエ技術については「今回も残念ながら相変わらずだ」⁴と厳しく評されるなど、テクニックの貧困は、度々問題点として指摘されており、ヴァラエティ・バレエの一側面であったことが窺える。今回得られた資料をさらに分析し、ローシー・ダンス・スクールの実態とともに、当時のロンドンでのバレエ訓練の内実を解明し、ローシーの帝劇でのバレエ指導の視座を検討したい。

今回の調査では、資料の閲覧に加えて、昨年度につづき学芸員のブリッチャード氏より、貴重なローシーと、19 世紀末から 20 世紀における欧州のバレエに関する情報について、直接お話を伺うことができた。そこで得られた情報は、今後筆者が収集した資料を分析・検討する上で大いに貢献する。

なお、今回閲覧した資料からは、エンパイアにおけるローシー、リーヴェに関する新たな情報は確認出来なかった。過去 2 度の海外調査によって得られた情報と併せても、彼らのエンパイアにおける活動期間には、未だ動向が確認できない空白の期間が存在する。彼らがエンパイア、あるいはロンドンにおいて活動していなかった、あるいは既述のダンス・スタジオでの指導が活動の中心となっていた可能性もある。今後、新聞・雑誌記事を読み込むことで情報収集に努めたい。

2-2-2.大英図書館新聞・雑誌記事の収集と閲覧

上記の施設において劇場に関わる貴重な関係資料の閲覧が叶ったが、当時の新聞や雑誌記事も上演作品やローシー夫妻を含めたダンサーに対する評価、また劇場の社会的な位置づけを考察するうえで大変重要な一次資料となる。

ローシーが活動していた当時、ロンドンでは *The Era*、*The Stage*、*The Penny illustrated Paper*、*The Sketch*、*The Illusutrated Sporting and Dramatic News*、*Ally Sloper's Half Holiday* など、演劇やオペラ公演、パントマイム、ミュージック・ホールやヴァラエティ劇場を主に扱ったり、それらに関する記事を継続的に掲載する新聞・雑誌が多く刊行されていた。

昨年度までに、当時の二大英国エンターテインメント専門新聞であった *The Era (Weekly)* と *The Stage (Weekly)*、そして *The Penny illustrated Paper*、*The Sketch* の調査を行った。本年度は大英図書館 *British Library* において、上記の 4 紙の不足部分を補うとともに、新たに *The Illusutrated Sporting and Dramatic News* について調査を行うこととした。なお、いずれも年代は 1901 (明治 34) 年から 1912 (明治 45) 年に限定した。

The Illusutrated Sporting and Dramatic News は、その紙名が示す通りヴィジュアル情報を多く含んだ、スポーツとエンターテインメント情報を中心に扱う新聞である。アルハンブラ劇場やエンパイア劇場のバレエ作品についても、*The Era* や *The Stage* のように文字による批評文が掲載されるとともに、ダンサーや舞台写真、舞台装置や衣裳のスケッチなどが数多く掲載されており、作品の詳細を読み解くのに大きく貢献した。

3.今後の研究へ

以上のように、本調査は移動日および施設の休館日を除いて実質 11 日間と短期間であったが、収穫ある調査となった。

特に、ローシーがロンドンにおいて自らダンス・スクールを開いていたことを示す自筆原稿やアルハンブラ・バレエ・スクールに関わる劇場関係者の書簡によって、当時のロンドンでのバレエ訓練実態の一端が明らかになったことは、ローシーの在日中のバレエ活動の視座を検討するうえで、非常

に重要な知見となる。また、本年度新たにミラノで調査を行ったことで、スカラ座とロンドンのヴァレエティ劇場、そして欧州内外の劇場やミュージック・ホール間におけるダンサーの往来、また上演作品の共通点など、当時のバレエ上演の特徴をより具体的に捉えることができた。

今後は、今回得られた資料を詳細に読み込み、欧州にロシア・バレエが台頭していた世紀転換期の文化的・社会的背景を踏まえつつ分析することで、ローシーが関わったバレエの特徴と評価を読み解き、彼の「バレエ観」が醸成された背景を明らかにしてゆく。

筆者の研究は、近代化の進む大正期日本においてローシーによってもたらされたバレエの特徴を、イタリアやイギリスといった世界のバレエ状況と関連づけながら捉えようとするものである。それは、バレエという一劇場文化の視点からグローバル化の一側面を検討することに繋がる。その意味でも、本調査が国際的な女性リーダーの育成に関わるプログラムの一環として、目的を果たせたものとする。

本調査で得られた知見は、筆者の博士論文のおそらく第一章と第二章に関わるであろう。また、本調査の成果の一部は本年度第 68 回舞踊学会大会（2016 年 12 月 3 日-4 日）で口頭発表を行った。

注

- ¹ 「ミュージック・ホール」と称されることも多いが、英国においてミュージック・ホール全盛期となった 19 世紀末から 20 世紀初頭には、歌や踊りに加えて、手品や曲芸など演し物の種類が増え、所謂「ヴァレエティ」を観せる「ヴァレエティ劇場」の呼称が一般化する。
- ² *Correspondence between James Glover and Arthur Sturges and Alfred Moul*, V&A Department of Theatre and Performance, GB 71 THM/75/6/16
- ³ Guest, 1992, 55
- ⁴ “L'ENTENTE CORDIALE BALLET.” *The Era*, 1904.9.3., 21

参考文献

- 市川雅「世俗のバレエ—エムパイア劇場について—」『女子体育』19 号、pp.50-56、右文館、東京、1977
- 井野瀬久美恵『大英帝国はミュージック・ホールから』朝日選書 395、朝日新聞社、東京、1990
- 上野房子「日本初のバレエ教師 G.V.ローシー 来日前の歩みを探る」『舞踊学』第 14 号、pp.1-11、舞踊学会、茨城、1992
- 上野房子「G.V.ローシー 日本初のバレエ教師 離日後の歩み（1918～1938）」『舞踊学』第 16 号、pp.61-62、舞踊学会、東京、1994
- 上野房子「アートとショービジネスの間で—ダンス揺籃期ロサンゼルス—」『大正演劇研究』第 8 号、pp.88-103、明治大学大正演劇研究会、東京、2000
- 鈴木晶『バレエ誕生』新書館、東京、2002
- 鈴木晶編『バレエとダンスの歴史：欧米劇場舞踊史』平凡社、東京、2012
- 星野高「帝劇の時代」神山彰編『商業演劇の光芒』pp.51-80、森話社、東京、2014
- Christout, Marie-Françoise, *Histoire du ballet*, Presses universitaires de France, Paris, 1966（佐藤俊子（訳）『バレエの歴史』白水社、東京、1970）
- Craine, Debra & Mackrell, Judith, *The Oxford Dictionary of Dance*, Oxford University Press, 2000（鈴木晶（監訳）『オックスフォード バレエ ダンス事典』平凡社、東京、2010）
- Reyna, Ferdinando, *Histoire du ballet*, Editions Aimery Somogy, Paris, 1964（小倉重夫（訳）『バレエの歴史』音楽之友社、東京、1974）
- Beaumont, Cyril W, *Complete book of ballets : a guide to the principal ballets of the nineteenth and twentieth centuries*, Putnam, London, 1956
- Cambiasi, Pompeo, *La Scala : 1778-1906 : note storiche e statistiche*, G. Ricordi & C., pref., Milano, 1906
- Carter, Alexandra, *Dance and dancers in the Victorian and Edwardian music hall ballet*, Ashgate, Hampshire, 2005
- Clarke, Mary & Vaughan, David, *The Encyclopedia of dance & ballet*, Pitman, London, 1977
- Guest, Ivor, “Russian Dancers in London Before Diaghileff”, *The Ballet Annual* No.14, pp.84-89, 1960.
- Guest, Ivor, *Ballet in Leicester Square*, Dance Books, London, 1992
- Guest, Ivor, *Romantic ballet in England*, Dance Books Ltd, London, 2014
- Haskell, Arnold L, *The national ballet : a history and a manifesto*, A. & C. Black, London, 1943
- Howard, Diana, *London theatres and music halls : 1850-1950*, the Library association, London, 1970
- Perugini, Mark Edward, *The Art of Ballet*, M. Secker, London, 1915
- Pritchard, Jane, Collaborative Creations for the Alhambra and the Empire, *Dance Chronicle*, Vol.24, No.1,

pp.55-82,2001

Pritchard,Jane,Archives of the Dance(24):The Alhambra Moul Collection at the Victoria and Albert Museum,

Dance Research,32-2,pp.233-257,Edinburgh University Press,2014

Scafidi,Nadia et al.,*La Danza in Italia*,Gremese,Roma,1998

Tintori,Giampiero,*Cronologia-opere-balletti-concerti 1778-1977*,Grafica Gutenberg editrice,Gorle,1979

やまだ さやか／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

山田小夜歌さんは、G.V.ローシーに関する研究を進めるにあたり、国内において幅広く精力的に調査を行ってきたことにより、これまで明確にされてこなかった彼の在日中の活動の全貌に迫りつつある。ローシーの活動のさらなる究明を通して彼のバレエ観に迫るためには、彼の在日前の足跡を辿り、かつその背景を読み解くことが不可欠となる。

今回の調査では、昨年度に続きヴィクトリア&アルバート博物館の閲覧室に訪問して、貴重かつ膨大な一次史資料の閲覧及び収集に加え、同館の学芸員より直接情報提供を受けられたことは大きな収穫となった。

また、過去2度の調査を踏まえ、ローシーのバレエの出自を探るべく、イタリアのミラノでも調査を行った。先方の都合により訪問が果たせなかった施設もあった中、ローシーのスカラ座や他の諸外国での活動の一部を解明できたことは大きな成果といえる。本調査で得られた史資料を用いた研究内容は、博士論文の第1章と第2章に関わる重要な部分になるであろう。さらに、この研究を深化させることによって舞踊学への貢献を期待している。

(お茶の水女子大学基幹研究院 文化科学系・猪崎 弥生)

Research on the Activity of G. V. Rosi before his years in Japan

Sayaka YAMADA

The purpose of this research was to gather materials on Giovanni Vittorio Rosi [1867-?] before his years at *Teikoku Gekijyou* in Japan.

Based on the materials collected in Milan and London, Rosi appeared in at least ten works in theatres in Italy, including *La Scala*, as well as those in other countries before he transferred to Variety Theatre in London.

The European theatre dancers of the time, as well as Rosi, worked beyond national borders, sometimes going as far as South America around the turn of the 20th century.

From the materials collected in this trip, it is assumed that Rosi's activities in Japan reflected various theatrical cultures of the time.